

フィラデルフィアにおける柴四郎 ―日米交流の起点として―

戸田 徹子

Shiba Shiro as a Hub of the Earliest Interactions between Japan and Philadelphia

TODA Tetsuko

Abstract

In the latter half of the nineteenth century, Philadelphia was a commercial, political and intellectual center, attracting many visitors and students from Japan. Shiba Shiro, better known for his pen name Tokai Sanshi was one of them. He studied in Philadelphia in the early 1880's. He got acquainted with Philadelphia Friends women, who later set up the Women's Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia and started Japan mission in 1885. Shiro successfully graduated from the Wharton School of Finance and Economy (of the University of Pennsylvania), which was the first collegiate business school in the United States. His achievement encouraged Iwasaki Hisaya (the future third Mitsubishi president) and other Mitsubishi people to study at the University of Pennsylvania, especially at the Wharton School. In a way, Shiba Shiro urged Philadelphia Friends to be related to Japan and inspired Japanese students to major in the newest and cutting-edge academic field. This paper intends to reveal how Shiba Shiro played a significant role to connect Japanese people and Philadelphia.

キーワード：Shiba Shiro (柴四郎), Tokai Sanshi (東海散士), Mary H. Morris (メアリ・モリス), Iwasaki Hisaya (岩崎久彌), Baba Tatsui (馬場辰猪), Philadelphia (フィラデルフィア), Quaker (クエーカー), Friends (フレンズ), Wharton School (ウォートン・スクール), University of Pennsylvania (ペンシルベニア大学)

1. はじめに
2. 柴四郎の略歴
3. フィラデルフィア・フレンドとの関係
4. 三菱との関係
5. おわりに

1. はじめに

クエーカーことフレンドの公式教会名はキリスト友会であるが、フレンド派と呼ばれることも多い。この教派の日本伝道はフィラデルフィア・フレンドによって始められた。同派の日本伝道の歴史を、私はフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の結成時から追っている。¹⁾ 長い間、研究してきたにもかかわらず、未だに解明できない疑問がいくつか残されている。その一つが、なぜフィラデルフィア・フレンドたちが日本を伝道地

に選んだかである。定説では、内村鑑三と新渡戸稲造がフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の会合に出席した際、日本伝道を要請したことが契機とされている。²⁾ しかしながら、同婦人外国伝道協会の記録を子細に読むと、内村と新渡戸のスピーチ以前の段階で、すでに日本伝道開始の決定は下されており、彼らの講演は言わば日本伝道開始のお披露目会のようなものであったことが判明する。

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

資料の中で日本人が初めて登場するのは、1883年8月14日の議事録である。フィラデルフィアに住む一人の日本人学生からの手紙が読み上げられている。この手紙には、フレンド派の教えは日本の上層階級に受け入れられるだろうと記されていた。新渡戸が渡米したのは1884年9月、そして内村の渡米は1884年11月のことである。それゆえ、この学生は新渡戸でも内村でもない。³⁾ それでは、この人物とはいったい誰なのか。1883年の時点でフィラデルフィアにいた日本人学生というのであれば、柴四朗だろうと推測し、これまで彼に関する資料を少しずつ集めてきた。柴四朗とは、明治時代に絶大なる人気を博した政治小説『佳人之奇遇』（全16巻）の作者、東海散士に他ならない。四朗は戊辰戦争で敗北した会津藩の出身で、苦勞してアメリカ留学の途を拓き、1879年に渡米。1882年から1884年までの3年間、ペンシルベニア大学で学んだ。四朗がフィラデルフィアで何を学び、どのような経験をしたのか、つねづね気になっていた。

ところが、その後、フィラデルフィア日米協会の依頼により *Phila-Nipponica: A Historic Guide to Philadelphia & Japan* (1999)⁴⁾ の改訂に参加することになったのだが、幕末から明治初期のフィラデルフィアと日本の関係を精査する作業において、柴四朗はフレンド日本伝道に係っていたばかりでなく、岩崎久彌（三菱財閥3代目）や馬場辰猪（土佐出身の民権家）のフィラデルフィア来訪にも関係していた可能性があることがわかった。そこで本論では、フィラデルフィアにおいて、柴四朗を起点としていかに日米交流の輪が広がっていったのか、彼の人脉を中心に考察する。

2. 柴四朗の略歴

まず柴四朗の略歴(1853-1922)を紹介する。⁵⁾ 柴四朗は1853年に会津藩士柴佐多蔵の四男として富津（千葉県）の会津陣屋で誕生し、藩校日新館で学んだ。会津藩主松平容保の京都守護職着任にともない、四朗の父親が上京。四朗も兄とともに京都に上がり、17歳で鳥羽・伏見の役に参加した。会津戦争では、白虎隊に編入されるも、生

来体の弱かった四朗は出陣のときに体調を崩して参加を見合わせ、生き延びた。戊辰戦争の敗北により、四朗は猪苗代で謹慎の身となった。その後、東京に護送され、護国寺に収容された。会津藩は国替えとなり、下北半島で新規まき直しを測り、斗南藩を興した。そこで会津藩士たちは、四朗の弟、柴五郎の伝記『ある明治人の記録』⁶⁾ が物語るように、辛酸をなめた。この時、四朗は家族と離れ、勉学の機会を求めて東京にひとり留まり、私塾を転々とした。そして1874年からは横浜税関長である柳谷謙太郎宅で書生暮らしを始めた。

1877年に西南戦争が勃発すると、四朗は憎き薩摩と戦うべく、これに志願した。この戦争中に熊本鎮台指令長官の谷千城（たに たてき、土佐藩出身）に見いだされ、土佐の人たちと顔見知りとなる。なかでも谷を通して豊川良平の知遇を得たことで、四朗の人生は好転する。豊川良平は三菱財閥の創業者、岩崎彌太郎の従弟で、幼い時に両親を失い、岩崎家に引き取られ、彌太郎とその弟である彌之助とは兄弟同様に育てられた。彌太郎の豊川良平に対する信頼は非常に厚く、長男久彌の教育をこの人物に委ねたほどだった。柴四朗が米国留学を実現できたのは、豊川を介して、岩崎家の後押しを得たからである。豊川は人を見抜くのが上手く、三菱に多くの有望な人物を紹介したと言われている。三菱に入社することも、経済界に進むこともなかったが、四朗は将来性のある人材として見込まれたのであろう。豊川は洋行する四朗のために送別会を催している。

四朗の渡米は1879年、27歳の時のことだった。その渡航目的は「財政・金融・経済」の勉強とされ、スポンサーである岩崎家の意向を反映したものとなっている。四朗はまずサンフランシスコに落ち着いたが、ここには横浜で寄寓先としていた柳谷謙太郎が総領事として赴任していた。最初に学んだのはサンフランシスコにある商業専門学校パシフィック・ビジネス・カレッジで、1880年12月にディプロマを取得した。次に東海岸に移り、マサチューセッツ州ケンブリッジにあるハーバード大学に入学し、政治学を専攻した。しかしながら、ここにいたのはごく短期で、フィラデル

フィアに転居し、1882年にペンシルベニア大学のウォートン・スクールに特別生として入学し、1884年12月に第一期生（the class of 1884）として卒業した。ウォートン・スクールはアメリカで最初の大学レベルのビジネス・スクールだった。四朗は理学士（経済学）の学位を取得し、卒業。1885年1月に横浜に到着した。

四朗は洋行帰りの経済学士となったわけであるが、すぐには職に就かず、まず東海散士のペンネームで1885年10月に『佳人之奇遇』を出版し、大きな人気を博した。その後も断続的にシリーズものとして書き続け、1897年までにその数は全16巻（8巻16編）に及んだ。

1885年12月、谷千城が第1次伊藤内閣において農商務大臣に任命されると、四朗は語学力と新知識を買われて大臣秘書官となった。そして1886年3月から1887年6月までの1年3か月および農商工業の調査を目的とするヨーロッパ視察に、四朗も随行した。この時の見聞はのちに『佳人之奇遇』に活かされることとなる。帰国して間もない7月に、谷が井上馨外務大臣の条約改正案に反対して大臣を辞任すると、四朗も辞職。その後は執筆活動に従事し、ジャーナリストとしても活躍した。日本で国会が開設されたのは1890年のことである。1892年に実施された第2回衆議院議員選挙に福島第4区から立候補し、初当選を果たした。その後も四朗は当選を重ねて衆議院議員をつとめ、大隈重信内閣で農商務次官、外務参政官の役職についた。1915年に外務参政官の職を最後に政界から離れ、1922年に熱海の別荘でその生涯を終えた。享年69歳であった。

柴四朗は作家、ジャーナリスト、政治家として多彩な活動をしたが、「国権伸張」を持論とし、政治的には愛国者の立場で一貫していた。

3. フィラデルフィア・フレンドとの関係

舞台をアメリカに転じ、そもそもクエーカーまたはフレンドとはどのような教派で、フィラデルフィア・フレンドとはいかなる人びとだったのかについて手短かにまとめておく。そのうえで、柴四朗とメアリ・H・モリス（フィラデルフィアの有

力者の妻で親日家となったフレンド女性）との接点を紹介する。

クエーカーことフレンドは17世紀後半のイギリスに起源をもつプロテスタント一派である。すべての人間は「内なる光」をもち、神は人間に直接語りかけると考えるがゆえ、人間の平等を唱え、聖書や教会をあまり重視しない。また平和主義者であり、イギリスで宗教的迫害を受けていた。ウィリアム・ペンはクエーカー指導者の一人で、イギリス国王チャールズ2世から北米に領地を下付されると、そこを「ペンの森」を意味するペンシルベニアと名付け、デラウェア川の河口に古代ギリシア語で「兄弟愛の町」を意味するフィラデルフィアの町を築いた。ペンはこの植民地をクエーカーの避難所としたばかりではなく、信仰の自由を保障して他教派にも門戸を開いた。フィラデルフィアは18世紀を通して英語圏においてロンドンに次いで2番目に大きな都市であり、英領北米植民地の政治・商工業の中心地となった。独立革命のときには、13植民地の代表はここに集まり、独立宣言に署名した。さらに1790年から1800年までの10年間、フィラデルフィアはアメリカ合衆国の首都であった。その政治的機能はワシントンDCに譲ったものの、19世紀にフィラデルフィアはアメリカの産業発展を支える都市の一つとして繁栄し、そして文化的・教育的な拠点となった。

このようなペンシルベニアおよびフィラデルフィアの歴史において、フィラデルフィア・フレンドたちは独自の地位を占めてきた。ウィリアム・ペンの同信者、そして植民地の先着者という有利な立場を活かし、イギリスで宗教的迫害を受けていた時とは対照的に、彼らは社会の上層部に進出した。さらに19世紀後半には、人口比上は少数派に転じたものの、一部のクエーカーは産業化するアメリカ社会にうまく適応し、富を蓄積した。そのようなフィラデルフィア・フレンドとして、ペンシルベニア大学ウォートン・スクールを創設した鉄鋼業界のジョセフ・ウォートン、海運業界の大君となったクレメント・アクトン・グリスコム、デパート業界で成功したジャスタス・C・ストローブリッジやアイザック・H・クロシヤな

どの名前が挙げられる。そしてフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会を創設したメアリ・モリスの夫、ウイスター・モリスもその一人だった。⁷⁾

ウイスター・モリス (1815-1891) は独立戦争で名を馳せたサミュエル・モリス大尉の子孫にあたる。母方から広大な土地を相続したばかりでなく、モリス・タスカー社の創業者の一人で、1855年から晩年までペンシルベニア鉄道の重役もつとめた。ちなみにモリス・タスカー社は、ウイスターの兄たちの始めた会社で、もともとは鉄製ストーブと暖炉用品を製造していたが、19世紀半ばにはガスパイプや水道栓等も製造するようになった。交替勤務制を採り、一時は1600人もの従業員を抱えていたという。ウイスターは同時にたいへんな慈善家で、ペンシルベニア病院評議会の会長やフィラデルフィアン郊外のエルウィンにある知的障害児施設の副会長、そしてハバフォード大学の理事などをつとめた。カンバーランド郡にカーライル・インディアン学校を開いたのもウイスターであった。日本でも、内村鑑三の「ウイスター・モリス氏に関する余の回顧」において黙徳の慈善家として紹介されている。⁸⁾

妻のメアリもまた活動的な女性であった。メアリ・ハリスは鉄工場主の娘として、センター郡 (現 the Bald Eagle 学区) に生まれた。幼くして両親を亡くし、クエーカーの鉄工場主を後見人として育った。長老派教会で洗礼を受けていたが、後見人の影響からクエーカーとなり、チェスター郡にあるクエーカーの寄宿学校ウェストタウン・スクールに学んだ。1863年、メアリはウイスターと結婚した。子供のころからメアリは地域奉仕に関心を持っていたが、結婚後はオーバーブルックにある自邸を拠点として様々な慈善活動に精をだした。フィラデルフィア孤児院の理事会メンバーで、キリスト教婦人矯風会の支持者でもあり、刑務所を出た女性囚人たちの更生施設であるハワード・ホームの幹事もつとめた。⁹⁾

メアリは1870年に中近東を旅し、そこで展開されているキリスト教の伝道活動に興味を抱いた。そして1882年には、地元フィラデルフィア

においてクエーカーの婦人外国伝道協会 (フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会) を組織し、1885年から日本伝道を開始した。婦人外国伝道協会メンバーたちはキリスト教伝道もさることながら、異教女性の地位向上と女子教育の振興を願っていた。それゆえ早くも1887年には東京に普連土女学校を開設し、メアリ自身も2度 (1890、1892-1893) ほど日本を訪問した。¹⁰⁾

メアリの女子教育への関心はこれにとどまらず、女子高等教育に向かう。日本で最初の女性医学博士である岡見京子は、モリス宅に寄寓しペンシルベニア女子医科大学に通った。¹¹⁾ 津田梅子は1882年にモリス邸を訪問しており、モリス夫人とは既知の間柄だったと思われるが、メアリは梅子が2度目の留学 (1889-1891) でフレンド派の学校であるプリンマー大学に入学するのを助けた。さらにメアリは日本女性たちのために留学奨学金制度を設けた。梅子は学業を終え帰国を前にして、後進の日本女性にも米国で高等教育を受ける機会を提供してくれるように、モリス夫人に頼んだ。これに応じて、15名の女性によって募金が始められ、「日本婦人米国奨学金」(別名「ジャパニーズ・スカラシップ」) が設置されたのである。毎年一人の日本女性がアメリカで学べるように日本奨学金委員会を組織し、これは1893年から1976年まで続き、25名の日本女性がフィラデルフィアにある大学(ほとんどがプリンマー大学)で学んだ。河井道もこれによってプリンマー大学に留学した女学生の一人だった。さらに1900年に、津田梅子が日本で最初の女子の高等教育機関である女子英学塾を創立したとき、モリス夫人は財政的にこれを援助した。¹²⁾

メアリの目は同性だけに向けられていたわけではない。メアリはフィラデルフィア在住の日本人学生を自宅に招きバイブル・クラスを開き、「日本人留学生の母」と慕われた。その中には内村鑑三や新渡戸稲造が含まれていたのである。¹³⁾

このようにメアリ・モリスは日本人との交流活動に熱心で、フィラデルフィアにおいて彼女は日米交流のキーパーソンとなった。それだけに、このメアリ・モリスをして日本に目を向けさせたの

が誰だったのかが気になる場所である。メアリ・モリスが内村や新渡戸よりも前に出会っていた日本人学生、あるいは1883年8月14日にフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会において、その手紙が紹介されたという日本人とはいったい誰であろうか。本論では2つの根拠を示し、それが柴四朗である可能性を指摘したいと思う。

(1) まず取り上げるのは、1912年時点のペンシルベニア大学日本人同窓会名簿(「大正元年改正・費府大学同窓会規約 会員名簿」)である。¹⁴⁾ そこから1900年までの日本人学生を在学順に整理し、「氏名、在学期間、職業/所属」を記すと、次のようになる。

今立吐醉 1875-1879
横浜地方裁判所嘱託通訳
柴 四朗 1882-1884
著述家
竹内周蔵 1885-1886 (退学)
大阪商船会社社員
林 民雄 1885-1889
日本郵船専務取締役
佐伯理一郎 1886-1888
京都佐伯病院長
文部省医術開業試験委員
串田萬蔵 1887-1890
三菱合資会社銀行部副長
川本恂蔵 1887-1890
医師
伊丹二郎 1888
日本郵船神戸支店長
菅沼友三郎 1888-1889
歯科医師
岩崎久彌 1888-1891
三菱合資会社社長
倉場富三郎 1891-1892 (退学)
会社員
河野徹志 1891-1892
河野病院長
杉浦貞次郎 1893-1894/1898
陸軍大学教授
塚本ふじ子 1894-1895 (退学)
兵庫県立高等女学校英語科主任
安川清三郎 1896-1900
鉱業

須藤吉之佑 1897-1900
私立立教大学幹事

これを見ると、1883年ごろ在籍していた日本人学生はほぼ柴四朗に限定される。

(2) もう一つ提示したい資料は、柴四郎の洋書リストである。上野格は「東海散士(柴四郎)の蔵書」において、柴四郎が会津図書館に寄贈した洋書をリストアップしている。宗教関係の本も多く含まれているが、そのうち少なくとも次の2冊はクエーカー関係の書籍である。

- ① Evans, Thomas, *A Concise Account of the Religious Society of Friends, Commonly Called Quakers*, Philadelphia, 1880.
- ② Braithwaite, Joseph Bevan, *Memories of Joseph John Gurney; With Selections from His Journal and Correspondence, 2 vols -complete in one-*, Philadelphia, 1854.

さらに①の扉には、“Mr. Shiro Shiba, with kind regards of Mary Morris, Iberbrook [sic], Philadelphia, 11. 22. 1882”と、贈り主からの献辞が記されている。¹⁵⁾ 他ならぬ、メアリ・モリスからのプレゼントであり、1882年11月22日という日付が物語るところは、二人はこの時点で既知の間柄であり、柴四郎は1883年8月14日の会合で読み上げられた日本学生でありうることである。

ちなみに②のタイトル名に含まれる人物、ジョセフ・ジョン・ガーニーとは19世紀半ばにイギリスのクエーカー界に福音的革新をもたらしたクエーカー指導者の一人である。著者ジョセフ・ベヴァン・ブレイスウエイトはイギリス人クエーカーで、モリス夫妻の友人だった。¹⁶⁾ さらに日本との関連を指摘すれば、ブレイスウエイトの子供のうち2人が日本に長期滞在した。娘メアリは、医療伝道のため赤坂病院(眼科)を開業していたウィリス・ノートン・ウィットニーの妻となり、来日している。またブレイスウエイトの息子の一人(ジョージ・ブレイスウエイト)は伝道のため

イギリスから日本に赴き、フレンド日本伝道に協力した人物であった。¹⁷⁾

以上の2点から、内村や新渡戸以前に、メアリ・モリスや婦人外国伝道協会メンバーと知り合いになっていた日本人学生で、日本伝道を促す手紙を書いたのは柴四朗であった可能性は非常に高い。先んじてフィラデルフィア・フレンドと接触していたものの、柴四朗はあまり宗教には関心がなかったようで、¹⁸⁾ この事実は四朗の口から語られることはなかった。これとは対照的に、日本伝道を助けたという点で、後に登場した内村と新渡戸の存在感と貢献度は非常に大きく、それゆえ日本フレンド伝道において四朗は見えない存在になってしまっていたと思われる。

4. 三菱との関係

次に、柴四朗と三菱との関係、さらにペンシルベニア大学と三菱との関係を取り上げたい。すでに述べた通り、柴四朗と三菱財閥の第3代目である岩崎久彌はともにペンシルベニア大学ウォートン・スクールを卒業した。それ以外にも1880年代から1890年代にかけて、三菱系の人々がペンシルベニア大学で学んでいる。ここでも柴四朗が先陣を切った可能性を指摘する。

19世紀後半、フィラデルフィアはボストンやニューヨークと並ぶ文化都市として、日本人留学生を惹きつけた。なかでも日本人留学生が多かったのはペンシルベニア大学だった。他のアイビーリーグの大学の多くが牧師養成のための神学校として始まったのとは異なり、ペンシルベニア大学は創設時から実学重視の大学であった。特に医学と経済の分野では常に先駆的な役割を果たしてきたが、この実学志向は柴四朗と岩崎久彌が学んだウォートン・スクールに最も反映されていると言えるかもしれない。

ウォートンはアメリカで最初の大学レベルのビジネス・スクールで、1881年にジョセフ・ウォートンによって創設された。¹⁹⁾ ジョセフ・ウォートン(1826-1909)はフィラデルフィア出身のクエーカーで、鉛や亜鉛、ニッケル、鉄などの金属産業

に係り、後にベツレヘム・スチール会社を興し財を築いた。国際競争の中でアメリカ産業が勝ち抜くためには保護貿易が必要との立場をとり、保護貿易主義者のヘンリー・C・キャリーを師と仰ぎ、日曜日の午後にはキャリーのサロンに出入りし彼の弟子たちとも交際した。ペンシルベニア大学に10万ドルの寄付をしてウォートン・スクールを創設したのは、保護貿易の主張を啓発するためでもあった。しかしながらウォートン・スクール自体はそれに拘束されることなく、カリキュラムに社会科学や政治科学を含めたより広い教育を展開するようになっていった。²⁰⁾

開学時から1901年まで、ウォートン・スクールの正式名称は“ The Wharton School of Finance and Economy”であった。開学当初は3年制(サブジュニア、ジュニア、シニア)を採っていたが、間もなく就学期間を短縮し、2年間(3、4年次)の専門課程となり、課程修了者には理学士(BS)が授与された。柴四朗はこの学校にまずは特別生として入学し、第一期生として卒業を果たした。ちなみにウォートン・スクール開校時の入学者は13名で、そのうちサブジュニアは2名、残りの11名は特別生。そして1884年6月に学士を取得して、卒業したのは5人だった。²¹⁾

柴四朗は在米中に何度も日本の経済雑誌『東海経済新報』に寄稿し、保護貿易の論陣を張った。²²⁾ 四朗が保護貿易を奉じるカリキュラムに惹かれてウォートン・スクールで学ぶことを決めたのか、それとも意図せずして入学し、結果的に保護貿易主張者となったのかは現時点では不明である。ただ、この保護貿易の主張は当時の三菱の利益にかなったものだったと思われる。それゆえ、四朗の教育成果をみて、岩崎久彌本人が、あるいは三菱が(具体的には、久彌留学時に父親はすでに他界していたので、叔父である三菱財閥2代目の岩崎彌之助が)、留学先としてウォートンを選んだとしても納得できる。

それでは岩崎久彌とは、どのような人だったのか。²³⁾ 久彌は明治維新の3年前の1865年、土佐藩(高知県)に生まれた。父親の彌太郎は海運業に着手して、三菱の創業者となった。この会社は

その後、鉱山、金融、倉庫、造船など、近代国家が必要とする様々な経済分野に進出していく。

久彌は1875年(9歳)に慶應義塾に入学したが、3年後に父親である彌太郎が開設した三菱商業学校に1期生として転じ、そこで英文テキストを用いて簿記や世界史、経済、法律などを学んだ。1886年5月に日本を出帆(20歳)。最初の2年間を大学入学準備に費やし、1888年にペンシルベニア大学のウォートン・スクールに進学し、主として財政学を学んだ。フィラデルフィアで久彌は質素な下宿に住み、ごく普通の学生生活を送った。当時、多くの日本人がフィラデルフィアで学んでいたが、久彌はよく彼らと交際し、日本人留学生を対象に自宅でバイブル・クラスを開いていたメアリ・モリスの家も訪問していた。お金に苦しんでいる日本人学生がいたら、匿名で経済的支援を与えたと伝えられている。

5年間の留学生生活を終え、久彌が帰国したのは1891年だった。アメリカ史において19世紀末の4半世紀はまさに石炭、石油、鉄鋼、鉄道、銀行などの基幹産業が発達し、独占化が進行する時代であった。久彌はアメリカ社会の変化を目の当たりにしてきたことになる。

1893年、久彌は28歳の若さで三菱の社長に就任した。この年には商法が施行され、個人経営の三菱は改組し組織経営による合資会社になった。久彌が社長職を辞したのは1916年のことであり、彼の任期(1893-1916)は日清戦争(1894)や日露戦争(1904)、第一次世界大戦(1914)に対応し、他方で、まさに日本の近代産業の勃興と発展の時期に重なる。この間、久彌は事業の多角化と分業化(事業部制)を推進した。

次に久彌と同時期(1888-1891)あるいは前後して、ペンシルベニア大学で学んだ三菱関係者の面々を在学順に紹介しよう。

林民雄 (1865-1936)

在学期間：1885-1889

高知県出身で、大学予備門での教育ののち、1885年に渡米。ペンシルベニア大学のカタログ(*Catalogue and Announcements*)よれば、1885年

度は学部の科学コースで Partial Student として、翌1886年度は Towne Scientific School の Partial Student として在学し、1887年度からウォートン・スクールの正規生となって1889年6月に卒業している。卒業式の次第には、取得した学位は the Degree of Bachelor of Philosophy と記されている。ペンシルベニア大学政治理財学科に学び、学士号を取得した。欧州を視察してから帰国し、1891年に日本郵船に入社した。様々な職種を経て、専務となった。²⁴⁾

串田萬蔵 (1867-1939)

在学期間：1886-1890、3328 Walnut St. に在住
正規生として入学し、1、2年次は Course of Science 専攻、ウォートンに進学した。串田は学業に秀でていたのみならず、スポーツ(ボート)や学生会でも活躍していた。ウォートン卒業後、フィラデルフィアの銀行で実務経験を積んだ。三菱合資会社銀行部副長となった。串田孫一の父である。²⁵⁾

伊丹二郎 (1863-1951)

在学期間：1888、423 S 40th St. に在住
1888年から1889年にかけてウォートン・スクールの3年生に在籍。1年間のみであったが、串田萬蔵の同級生となった。1893年に日本郵船に入社した。日本郵船は1885年に郵便汽船三菱会社と共同運輸会社が合併し日本郵船会社となり、この年の1893年に新たに株式会社、日本郵船株式会社として誕生したばかりであった。伊丹は後に麒麟麦酒に転じ社長、会長を務めることになるが、キリンビールもまた三菱系の起業だった。伊丹については、久彌とほぼ同時期に留学していることに注目したい。²⁶⁾

倉場富三郎 (1870-1941)

在学期間：1890-1892

貿易商トマス・グラバーの長男。倉場富三郎は1891年にペンシルベニア大学の医学準備コースに入学し、生物学を専攻した。彼は2年間学んだだけで1892年には退学した。帰国し、ホームリ

ンガー商会に勤めた。この商会は1907年に長崎汽船漁業を設立し、鋼製トロール漁船による操業を始めたが、このころから富三郎は、日本西部及び南部魚類図譜（グラバー図譜）の編纂を開始している。生物学を専攻した富三郎が水揚げされた魚介類をみて、関心をそそられたことは想像に難くない。²⁷⁾

三菱に就職することはなかったが、倉場富三郎の留学にも岩崎家が関連していた。富三郎の父、トマス・グラバーは、長崎の風光明媚な洋館グラバー邸にその名を残している。かれはスコットランド出身の貿易商で1859年来日し、薩摩、長州、土佐などの討幕派諸藩に武器弾薬や船舶等を売って巨万の富を得た。いわゆる武器商人である。グラバーは維新後も日本に留まり、明治政府の富国強兵、殖産興業の政策に協力した。岩崎彌太郎の指南役を果たし、1885年以降は三菱の相談役をつとめていた。岩崎一族とグラバー家は親しい関係であり、富三郎は三菱の子弟寮から学習院に通った。彌太郎の弟で三菱財閥の第二代目である彌之助の家に寄宿していた。当然のことながら、久彌とも顔見知りであったろう。一緒にフィラデルフィアに滞在した期間は1年に満たなかったが、久彌は先輩として富三郎が落ち着くのを見守った。日本ではこの頃、グラバーと彌之助はビール会社創設をめぐる強い協力関係にあった。彌之助は伊藤博文にグラバーの叙勲を働きかけたことがあり、これは1908年に実現した。

馬場辰猪（1850－1888）

一方で、土佐出身の民権家で米国に亡命した馬場辰猪にとって、フィラデルフィアは終焉の地となった。馬場はペンシルベニア大学に在学したわけではなかったが、岩崎家とは密接な関係を持っているので、あわせて紹介する。²⁸⁾

辰猪は1850年に土佐の上士の家に生まれた。17歳の時に江戸留学の藩命により福沢諭吉の塾で学び、その後、長崎英語伝習所でフルベッキから英語を学んだ。1870年に土佐藩の藩費留学生としてイギリスに渡り、海軍機関学を学んだ。1874年に帰国。1875年には今度は明治政府の留

学生として再び渡英し、主として法律を学んだ。2度の留学により、イギリス滞在期間は通算して7年に及ぶ。福沢諭吉からも将来を嘱望され、帰国後は慶応義塾や三菱商業学校で教鞭をとった。辰猪は留学を通して言論思想の自由に深く傾倒し、帰国後、中江兆民らとともに自由民権運動の指導者となった。しかしながら、その過激な言動から政治演説を禁止されるなど、政府から要注意人物とみなされるようになる。1885年には爆発物取締罰則違反で逮捕され、翌年に無罪判決となったが、アメリカに亡命した。辰猪が（久彌の後を追うように）横浜から出帆したのは1886年6月のことであり、サンフランシスコ、ニューヨークと移動し、1887年3月にフィラデルフィアにたどり着いた。

慶応義塾と三菱商業学校で教えていた辰猪は、岩崎久彌にとっては恩師であった。かつ辰猪は婚姻関係により岩崎一族と結ばれていた。豊川良平は岩崎彌太郎の従兄弟で、久彌の教育係を任されていた人物であるが、その妻は馬場辰猪の姪、屋寿（安）だった。屋寿は自宅を離れ学校に通う久彌を預かり、生活の世話したのである。それゆえペンシルベニア大学の病院に辰猪を見舞い、そして葬儀を出したのが久彌だったのは不思議ではなかった。

以上、縷々述べてきたが、1880年代から1890年代にかけて、ペンシルベニア大学に土佐出身者あるいは三菱関係者が集っていたのである。特に1888－1889年度には、ウォートン・スクールに林民雄が4年生として、串田萬蔵と伊丹二郎が3年生として在学し、岩崎久彌はウォートン進学を前提として2年生として社会科学を学んでいる状態だった。当時、ペンシルベニア大学はまだ小規模で、この年度、学部の在学者数は全部で346名。一学年の在学者数は100名以下で、3年生と4年生から構成されるウォートンの学生数は31名にすぎなかった。それゆえ1888－1889年度においては、日本人学生3名がウォートン・スクールの約一割を占めていたことになる。そして、その先鞭をつけたのが豊川良平と親しく、岩崎家から学

資を得て留学した柴四朗だった。

5. おわりに

戊辰戦争での敗北をばねに洋学に活路を求め、海外に飛び出した会津人は少なくない。東海散士こと柴四朗もその一人で、アメリカに留学し、主人公が世界を駆け巡る政治小説で名を成した。この小説はフィラデルフィアから始まり、主人公である東海散士は「独立閣」すなわちインディペンデンス・ホールで幽蘭と紅蓮の二人の美女と出会う。明治初期、この印象深いシーンで、フィラデルフィアの名は日本中に知られることとなった。この点で、柴四朗のフィラデルフィアに対する貢献度は高かったといえる。だが、四朗は他の面でも日本とフィラデルフィアを繋いでいた。宗教には関心があまりなかったようで、地元のクエーカーたちとの交流について、ことにメアリ・モリスについて語ることはなかった。また当時まことに希少だった洋行帰りの経済学士だったにもかかわらず、経済界で活躍したわけではなかったのも、アメリカで最初のビジネス・スクールと三菱を繋いだ事実も忘れ去られていたようだ。本論では、柴四朗のフィラデルフィア・フレンドとの関係、そして三菱との関係を解明することによって、四朗がフィラデルフィアにおいて日米を繋ぐ人脈を築いていた事実を確認できたことと思う。

註

- 1) 戸田徹子「日本フレンド伝道の歴史」『日本宗教史研究年報』7巻(1986)、42-85;「フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の誕生」『山梨県立女子短期大学紀要』33号(2000)、73-86;「婦人外国伝道協会から外国伝道協会へ」『山梨県立女子短期大学紀要』34号(2001)、85-92;「フィラデルフィア・フレンドと日本年会1900-1947」『山梨県立女子短期大学紀要』36号(2003)、11-22;「フィラデルフィア年会ミッション・ボードの選択」『史境』48号(2004)、98-114;「ミッション・ボードと排日移民法」『山梨県立女子短期大学紀要』38号(2005)、19-29など。
- 2) これは駐日フレンド宣教師エディス・シャープレスの記述に依拠していると思われる。Edith F. Sharpless, *Quakerism in Japan: A Brief Account of the Origins and Development of the Religious Society of Friends in Japan*

- (Philadelphia: Friends World Committee for Consultation, 1944), 5.
- 3) この点は拙稿ですでに指摘済みであった。戸田徹子「フレンド派日本伝道開始に関する覚書—内村と新渡戸を中心に—」『内村鑑三研究』26号(1988)、107-108。
 - 4) Felice Fischer ed., *Phila-Nipponica: A Historic Guide to Philadelphia and Japan* (Philadelphia: Japan America Society of Greater Philadelphia, 1999).
 - 5) 柴四朗の経歴等については主として次の3点の文献を参照した。「東海散士」、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』21巻(1964)、337-371; 柳田泉「『佳人之奇遇』と東海散士」、『(明治文学研究第8巻)政治小説研究 上巻』(春秋社、1967)、361-483; 大沼敏男「東海散士柴四朗略伝—人と思想」、大沼敏男・中丸宣明校注『(新)日本古典文学大系 明治編17)政治小説集2』(岩波書店、2006)、667-682; 中井けやき『明治の兄弟』(文芸社、2008)。
 - 6) 石光真人編著『ある明治人の記録—会津人柴五郎の遺書』(中公新書、1971)。
 - 7) Philip S. Benjamin, *The Philadelphia Quakers in the Industrial Age 1865-1920* (Philadelphia: Temple University Press, 1976), 49-72; John M. Moore ed., *Friends in the Delaware Valley* (Friends Historical Association, 1981), 60-61.
 - 8) 『内村鑑三全集』23巻(教文館、1971)、101-103。
 - 9) “Mary Harris Morris (b. 1836),” <http://www.centrecountyhistory.org/morris.html> (2012/11/11)
 - 10) 前掲「フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の誕生」、79。特に2回目の訪日時には、滞在先とした帝国ホテルで定期的に日本女性たちのために聖書研究会を開催した。亀山美知子『女たちの約束』(人文書院、1990)、232-235、272-273。
 - 11) 前掲『女たちの約束』、233-235。
 - 12) 内田道子「メアリ・H・モリス奨学金」、飯野正子・亀田昴子・高橋裕子編『津田梅子を支えた人びと』(有斐閣、2000)、177-201。
 - 13) 日本人留学生の母として慕われた。8) 前掲『内村鑑三全集』23巻、101-103。
 - 14) ペンシルベニア大学同窓会名簿については、次の「けやきのブログII」から情報を得た。<http://keyakinokaze.cocolog-nifty.com/rekishibooks/2009/11/post-4a4c.html> (2012/09/01) なおこの名簿からは漏れているのだが、ペンシルベニア大学の最初の日本人留学生は薩摩藩出身の前田献吉であり、1872年9月に医学部に入学した。帰国後は海軍医務局長、釜山総領事、駒場農学校長などを歴任した。
 - 15) 上野格「東海散士(柴四朗)の蔵書」『成城大学経済研究』55・56号(1976)、223-249。
 - 16) Margery P. Abbott etc. ed., *The A to Z of the Friends*

- (*Quakers*) (Lanham, Maryland: Scarecrow Press, 2003), 30-31, 123-124.
- 17) ホイトニー夫人・梶夫人共著『ドクトル・ホイトニーの思い出』(基督教書類会社、1930)、65-68。
- 18) 前掲「東海散士(柴四朗)の蔵書」、247。
- 19) Steven A. Sass, *The Pragmatic Imagination: A History of the Wharton School, 1881-1981* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1982), 3-54.
- 20) Steven A. Sass and Barbara Copperman, “Joseph Wharton’s Argument for Protection,” *Business and Economic History*, 2d ser., 9 (1980): 51-52.
- 21) *The Pragmatic Imagination*, p. 50; *University of Pennsylvania: Catalogue and Announcements, 1881-1882*, pp. 38, 41. 以下、参照したペンシルベニア大学の史料は大学資料室のウェブ上で公開されている。<http://www.archives.upenn.edu/primdocs>
- 22) この雑誌は保護貿易擁護のために発刊されており、社主は豊川良平だった。前掲『明治の兄弟』、163-171。
- 23) 岩崎久彌に関する伝記的情報は主として次の2点から採った。成田誠一『岩崎久彌物語：雲がゆき、雲がひらけて』(東京都公園協会、2001)。岩崎家伝記刊行会編『(岩崎家伝記5) 岩崎久彌伝』(東京大学出版会、1979)。
- 24) *University of Pennsylvania: Catalogue and Announcements, 1885-1886*, p. 32; *1886-1887*, p. 34; *1887-1888*, p. 28; *1888-1889*, p.29. “One Hundred and Thirty-third Annual Commencement, June 5th, 1889,” p. 3.
- 25) 「申田萬蔵」、国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』(吉川弘文館、1979)、4、759-760; *Catalogue and Announcements, 1886-1887*, p.32; *1887-1888*, p. 30; *1888-1889*, p.31. 申田が卒業した Class of 90 については、「イアー・ブック」が残されており、学業と課外活動における申田の活躍ぶりが分かる。 *The Record of the Class of '90 of the University of Pennsylvania* (Published by the Graduating Class of the College Department, June, 1890), p.12.
- 26) *Catalogue and Announcements, 1888-1889*, p.30; *The Record of the Class of '90*, p.12
- 27) トマス・グラバーと三菱とは協力関係にあった。三菱グループのポータルサイトにおいて、グラバーは「三菱の人ゆかりの人」として紹介されている。「トマス・グラバー (上)(下)」<http://www.mitsubishi.com/j/history/series/man/man01.html> (2013/09/24)
倉場富三郎については、「倉場富三郎(Thomas Albert Glover)について」: 長崎大学のサイト:<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/05.php> (2013/08/24)と“The Doric Columns: Glover’s Son Tomi-San”<http://mcjazz.f2s.com/GloverTomi.htm> (2013/08/24)を参照した。
- 28) 馬場辰猪の伝記としては、萩原延壽『(萩原延壽集1) 馬場辰猪』(朝日新聞社、2007)がある。辰猪のフィラデルフィアでの客死はすでに『フィラ - ニッポニカ』で紹介されている。Masayoshi Matsumura, “Baba Tatsui (1850-1888): Statesman, Political Author,” *Philipponica*, 16-18.